

AFRO BLUE

Dream of a land my soul is from
I hear a hand beat on a drum
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue

Elegant boy, beautiful girl,
Dancing for joy, delicate world
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue

Two young lovers are face to face
With undulating grace
They gently dance 'til they slip away
To some secluded place
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue, ah, ah

Whispering trees echoes their sighs
Passionate plea, tender reply
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue

Lovers in flight up where they glide
Burst at the heights gently sub-side
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue, Afro-Blue

As I though it would be
Shades of reality
Until it seems it's not a dream
That you are you and me
Shades of delight, coco-hue
Rich as the night, Afro-Blue

LOVE VIBRATIONS

*Emptiness surrounds my lonely heart
And life has lost its thrill
Wondering why my mind's been
Torn apart
Have no dreams left to feel
And then you came my way
To wash away the gloom and
Show the strength of love

Love stepped in too gently
Plant its seed
And then things began to grow
In my heart
I feel there is a me

And I want you to know
You are my one true love
The one I've waited for and, oh,
You're meant for me

*repeat

BLUES MEDLEY;

EVERYDAY I HAVE THE BLUES-STORMY MONDAY BLUES

*Everyday, everyday I have the blues
*repeat
You see me standing here
I'm telling you that I've paid my dues

*Packing up my bags gonna move on
Down that line
*repeat
There ain't nothin' happenin' here
But this achin', breakin', aching heart of mine

*They call it stormy Monday
But Tuesday is just so bad
*repeat
Wednesday's worse and Thursday's
All so sad

*The eagle flies on Friday
Saturday I go out to play
*repeat
Sunday I go to church
Kneel on my knees and pray

I pray, I pray, I pray
*I pray, Lord, Lord, Lord,
Have mercy, Lord, have mercy on me
*repeat

*I ain't so crazy about my baby
But my baby gone and left me in misery
*repeat

Well, everyday I have the blues
Everyday, everyday, I have the blues
Everyday, everyday, everyday

*Everyday, everyday, everyday, everyday
I have the blues
*repeat
You see me here standing
I'm telling you that I've paid my dues
I've paid my dues

*Packing up my bags gonna move on
Down that line
*repeat
There ain't nothing happening here
But this aching heart of mine

*Everyday, everyday, everyday
I have the blues
*repeat
You see me here standing
I'm telling you that I've paid my dues

'LITTLE B's POEM

Won't you know you make my heart sing
Rejoice, rejoice
Let all the bells ring
For 'Little B', you are my heart's delight
You make life sunny and bright
'Little B', you are all my heart sings for

*Before you came and brought us such joy
How we hoped and prayed that you'd be a boy
But, little girl, you are my heart's delight
You make life sunny and bright
'Little B', you are all my heart sings for

Oh, oh, oh, you are such a pretty baby
We are so very glad you came my way

Born to love you make my heart sing
Well, rejoice let all the bells ring
For 'Little B', you are my heart's delight
You make life sunny and bright
'Little B', you are all my heart sings for

*repeat

RAINDROPS KEEP FALLIN' ON MY HEAD

Raindrops are fallin' on my head
Just like the guy whose
Feet are too big for his bed
Nothin' seems to fit
Raindrops are fallin' on my head
They keep fallin' so I just
Did me some talkin' to the sun
I said I didn't like
The way he got things done
Sleepin' on the job
Raindrops are fallin' on my head
They keep fallin'!
But there's one thing I know
The blues they send to meet me
Won't defeat me
It won't be long till
Happiness steps up to greet me
Raindrops are fallin' on my head
But that doesn't mean
My eyes will soon be turnin' red
Cryin's not for me
I'm never gonna stop the rain by complainin'
I'm never gonna stop the rain by complainin'
I'm never gonna stop the rain by complainin'
Because I'm free nothin's worryin' me
Nothin's worryin' me

LOVE FROM THE SUN

Sun, sun
We get our love from the sun
There's hope for everyone
Love from the sun
Love from the sun
One sun, where one and one is one

Love is free, love is fun
Love from the sun
Love from the sun
We know the world's full of sadness
But let's bring in some gladness, too

All of the people we meet
Will bring their notes into harmony
Some people run from the sun
And life and leave their work undone

Let's bring love to our planet
Erase the borders
Expand it, love, love

Sun, sun,
We get our love from the sun
There's hope for everyone
Love from the sun
Love from the sun

PEOPLE MAKE THE WORLD GO AROUND

Trashman didn't get my trash today
Oh, why? Because they want more pay
Buses and taxis want a raise in fare
So they can help pollute the air

But that's what makes the world go around
The up's and down's a carousel
Changing people's heads around
Go underground
Young men
People make the world go around

Wall Street lose now on every share
They're blaming it on longer hair
Big men smoking in their easy chairs
On fat cigars without a care

*But that's what makes the world go around
The up's and down's a carousel
Changing people's heads around
Go underground
Young men
People make the world go around

*repeat

●ディディ・ブリッジウォーターは、1950年5月27日、テネシー州メンフィスに生れた。父親のマシュー・ゲリットは、ピアニストのフィニアス・ニューボーンやトランペッターの故ブッカー・リトル、テナー・サクスのチャールス・ロイドを指導したハイ・スクールの音楽教師である。父親のマシューはジャズ・トランペット奏者でもあった。家庭には、レコードがたくさんあり、ディディはなかでもボーカル・レコードをきくことが大好きであった。ディディが母親のマリアンに『将来はボーカルのビッグ・スターになるの』と幼い夢を打ち明けたのが5才のとき。そのころのディディは、レナ・ホーンやダイナ・ワシントンの物真似をしたり、テレビのコマーシャル・ソングを巧みに口ずさんだりしていたという。ジェミナイの星のもとに生れたディディは、すでにこのころ、自分の未来を見ていたのかもしれない。

ディディが本気でボーカリストになることを志したのは、13才のときだという。ジュニア・ハイ・スクールの仲間とともにボーカル・トリオをつくっては、キャンパスで歌ったり、アマチュアのタレント・ショーに参加したりして、歌手への道をめざしている。

ディディのキャリアのうへではっきりとアイドルといえる存在は、16才のときにレコードできたナンシー・ウィルソンである。キャノンボール・アダレイと共演しているナンシーの歌に、ディディはすっかり夢中になった。そんなディディをみて、父親のマシューはディディには、歌手の素質がありそうだとつおれのバンドで歌ってみたら——と娘を夜毎のバンド・スタンドに立たせた。16才のディディにとって、これがプロへの第1歩となった。

18才でディディはミシガン州立大学に入り、英語学を専攻する。もちろん、通学のかたわら、ローカル・バンドで歌うこともつづけている。19才になる直前の1969年4月、ディディは、テナー・サクスの奏者アンディ・グッドリッチのカルテットとともにイリノイ大学のジャズ祭に出て3,000人の大聴衆を前に歌った。このステージがきっかけで、ディディはイリノイ大学ジャズ・バンドの指揮者ジョン・ガーヴェイに認められ、その年の秋、イリノイ大学ジャズ・バンドとともに米國務省派遣音楽使節としてソ連に渡る幸運をつかんでいる。またこの演奏旅行はディディにもうひとつの幸運をもたらした。現夫君セル・ブリッジウォーターとの出会いである。当時、バンドのトランペッターだったセルと恋に陥ったディディは、半年ほどの交際をへて、1970年6月に結婚、まもなく2人はジャズのメッカ、ニューヨークへと赴いた。

●セル・ブリッジウォーターは、1942年10月10日、イリノイ州シャンペーンに生れた。このセルもまた音楽一家の出で、父がトランペット奏者、母がピアニストで歌手という家庭に育っている。幼いころからサッチモやベイシー楽団のレコードにききなじみ、父親からトランペットの演奏法、母親からはピアノ奏法とサクスの運指法を教わって、セルはトランペットにするかサクスにするかで迷ったほどだ。結局、トランペットを選んだセルは、イリノイ大学のインストラクターについてプライベート・レッスンを受け、同大学に進んでからはすぐさま同大ジャズ・バンドで演奏するようになった。セルはこのころ両親がトランペットの名手クラーク・テリーと親しいことを知り、大学生活も3年半を過ぎたころ、『ニューヨークに出たいが、そちらの事情はどうか』と手紙でたずねてみた。クラーク・テリーはその返事の中で『ニューヨークに来るつもりなら、ジャズのみならずスタジオ・ワークからときには交響楽団での演奏もこなせるほどでなければ駄目だ』と忠告された。そこでセルはいったん大学を中退、シカゴに出てプロにまじって経験を積み、懸命の勉強をつづけた。まもなくセルは兵役にとられ、64年11月から66年11月までを陸軍で過す。セルは除隊とともに再び古巣のイリノイ大学に戻り、ジャズ・バンドに復帰、主要メンバーとして活動をはじめた。ディディとの出会いは、このあとしばらくのちになってやってくることになる。

●このセルには、4才年下のロン・ブリッジウォーターという実弟がいる。1946年12月30日生れで、このロンは、1965年から67年にかけてウェスターン・イリノイ大学で体育を専攻するかたわら、テナー・サクスを吹きはじめている。68年から69年にかけてロンは兵役につき、除隊後の70年から71年末までは、兄と同じイリノイ大学に移り音楽を学んだ。つまり、70年の前半、セルとディディが6月にニューヨークに出るまでは、兄弟はそろってイリノイ大学に籍を置いていたわけだ。ロンによれば“ブリッジウォーター・ジャズ・ファミリー”はこのこ



PA-7095

ディディ・ブリッジウォーター 『アフロ・ブルー』

- A面：1. アフロ・ブルー**
Afro Blue
- 2. ラブ・バイブレーションズ**
Love Vibrations
- 3. ブルース・メドレー：**
エブリディ・アイ・ハヴ・ザ・ブルース
Everyday I Have The Blues
ストーミー・マンディ・ブルース
Stormy Monday Blues
- B面：1. リトル・ビーズ・ポエム**
Little B's Poem
- 2. 雨にぬれても**
Raindrops Keep Fallin' On My Head
- 3. ラブ・フロム・ザ・サン**
Love From The Sun
- 4. ピープル・メイク・ザ・ワールド・ゴー・アラウンド**
People Make The World Go Around

パーソナル：

ディディ・ブリッジウォーター／ヴォーカル
セル・ブリッジウォーター／トランペット、カリンバ
ロン・ブリッジウォーター／テナー・サクスの、バイブラ
クラップ、カウベル、アフリカン・カスターネット、ベル
ローランド・ハナ／ピアノ、エレクトリック・ピアノ
ジョージ・ムラーツ／ベース
日野元彦／ドラムス、ベル、パーカッション

録音：1974. 3. 10/12/13/14 於：アオイスタジオ
発売：トリオ・レコード／トリオ株式会社

ろからすでに地元で演奏活動をしていたという。ディディとセルがニューヨークに出たあと、イリノイ大学に残ったロンは、兄同様、同大ジャズ・バンドの主要ソロイストになり、70年にはノートルダム大学の対抗ジャズ祭で最優秀ソロイストに選ばれ、71年度は、最優秀コンボ、最優秀ソロイスト、最優秀リード奏者という三冠王の栄誉に輝いている。ロンは、その後、兄セルの紹介でサド・ジョーンズ＝メル・ルイス楽団への参加が決ると、大学を中退して72年2月にニューヨークに出ることになる。

●一方、ひと足さきにニューヨークに出たセルとディディは、セルがホレス・シルヴァー・クインテット、ディディが銀行勤務という生活でスタートする。6ヶ月後の70年12月、シルヴァー・クインテットが解散、セルはサド・ジョーンズ＝メル・ルイス・ジャズ・オーケストラのトランペッターに起用される。その直後、ディディもサド＝メル楽団のオーディションに合格する。

●私がディディ・ブリッジウォーターのボーカルを最初にきいたのは71年7月のことだから、ディディがサド＝メル楽団に入って半年目のころだ。ディディは、まだ、どこもなくあどけない童顔を残していた。それもそのはずまだ若冠21才だったのだ。曲は〈バイ・バイ・ブラックバード〉や〈エヴリディ・アイ・ハヴ・ザ・ブルース〉など、いまでも彼女がよく歌う曲だ。第一印象として残っているのは、リズム感の良さと天与の魅力的なよくのびる声であった。とくにブルース・ナンバーにみせるフィーリングの良さは、当時、無名のこのシンガーを強く私に印象づけた。

ディディの名がジャズ・ミュージシャンたちの間で、特別な好感をもって囁かれたしたのは、それからまもなくのことだ。72年になると、ディディはセルとともにマックス・ローチ・クインテットの「フリーダム・ナウ組曲」の上演に加わるようになり、ノーマン・コナーズの「ダンス・オブ・マジック」にも参加、この年のダウン・ビート誌国際批評家投票「注目のタレ

ント」 「歌手」部門で第1位に選出されるまでになった。レコード分野でも、ノーマン・コナーズやスタン・クラークのアルバムなどに起用され、特異な才能が注目されはじめた。

ディディは、いかにもジェミナイの星らしく、2つの心をもっている。サド＝メル楽団のディディは、オーソドックスなジャズ・カールストであり、「ダンス・オブ・マジック」やマックス・ローチやスタン・クラークのアルバムなどで共演するときのディディは、ボーカルのニュー・スタイリストである。しかも、この両分野での大役を、楽譜の読めないディディがよくもこなせるものだと感心する。もちろん、ディディは、夫君のセルから、音楽的な忠告をずい分与えられ、学んでいる。しかし、なんといってもディディは、歌手として類まれな天分に恵まれていた。71年7月のころは、まだディクソンなどに堅さのあったディディが1年のちにはもうすでにサラ・ヴォーンやカーメン・マクレエといった大歌手のあの貫録に肉迫するような進境を示し、73年5月からボーカル・コーチに師事して発声の基礎、フレージングなどを学びはじめてからのディディはまさに飛躍的な成長をとげた。レッスンを受けはじめてからディディの声域は、2オクターブ半にまでひろがり、いまでは夫君のトランペットに合せてどのレンジでもやすやすと歌えるという。ディディがこのアルバムの〈ブルース・メドレー〉でしかせるホーン・ソロとの掛け合いをおききになれば明らかのように、彼女の武器はその驚異的な「耳」だ。この耳をもって生れた感受性とでこれまでのディディはサド＝メル楽団を相手に唄い、即興性を要求される「ダンス・オブ・マジック」などで唄ってきた。つまり、これまでのディディはその偉大なナチュラル・タレントを生かしてきただけなのだ。

●このアルバムは、そうした未完の大器ディディがそのもてる才能をフルに発揮した最初のレコードだ。ディディは、いま、このデビュー・アルバムをとりおえてまたひとつ新たな目標を自分に課そうとしているようだ。それは音楽をよりよく理解するために読譜力を身につけ、作詞・作曲もし、最終的にはミュージシャン／シンガーになることである。私は、この人は、必ず、その目標を達成すると信じている。

●ところで、このアルバムは、ディディにとってはもちろんのこと“ブリッジウォーター・ジャズ・ファミリー”にとっても記念すべきデビュー・アルバムとなった。曲目はディディが選び、曲の配列は3人が決めた。アルバム・タイトルはディディの意見を入れたものである。大学で英語を専攻しただけあってディディは歌詞のすぐれたオリジナル作品をいくつか選び、メロディの美しい曲も加え、そしてやはりブルースを歌っている。ディディは、なかでも〈ラブ・フロム・ザ・サン〉の詞にとても心を打たれているようで、どうしても原詞を挿入してほしいと注文した。無事に吹込みが終ったあとで、ディディがメモに残してくれたノートによれば、〈アフロ・ブルー〉はこの曲のロマンチックなストーリーに心を奪われて、いつかは歌ってみたいと念願していた曲だという。序奏部で奏でられるアフリカン・サウンド、母なる国アフリカの大地の讃歌、詞もメロディもディディは大好きだという。〈ラブ・バイブレーションズ〉は、ホレス・シルヴァーが作詞・作曲し、ブルーノートに吹込んでいる作品。ディディは、シルヴァーが書いたこの詞に心から共感をおぼえているという。〈ブルース・メドレー〉は、文句なしにこのアルバムの圧巻のひとつ。ディディが楽器に合せて唄うアドリブは、驚くばかりに見事である。〈リトル・ビーズ・ポエム〉はダグ・カーンとジーン・カーンのコンビが初演した作品。ブラック・ジャズに吹込みがある。ボイスをホーン的に用いたセクションがディディに挑戦意欲をかりたてたという。そして〈レインドロップス・キープ・フォーリング・オン・マイ・ヘッド〉は、セルとディディのフェイバリット・ソング。変った編曲でバート・バカラックをびっくりさせたいのだそうだ。〈ラブ・フロム・ザ・サン〉は、ディディが最近ノーマン・コナーズの同名のアルバムでも歌っている作品。ここではローランド・ハナのピアノだけを伴奏に歌っているが、きき手を自然に歌の世界にひきずり込む不思議な力がある。この曲の詞は裏面のとうりである。〈ピープル・メイク・ザ・ワールド・ゴー・アラウンド〉は、セルの編曲がとても気に入っている。それに、世の中が荒廃しつつあるとき、この曲の詞はディディには、とても大切なことのように感じられてならない。

●ディディはひとつひとつの曲に関してこのようにメモしたあと、最後を、『私の最初のアルバムが日本でつくられたことは、生涯忘れられない思い出になることでしょう。そのことを、とても感謝しています——』と達筆で結んでいた。

(Kiyoshi Koyama 児山紀芳)